谷崎潤一郎『鶴唳』における漢籍要素

李　春草

はじめに

『鶴唳』は、谷崎潤一郎が「支那趣味」の作品を集中的に創作した時期に書かれた作品であり、作家自身の支那趣味が、中国に対して強い憧憬の念を持つ主人公靖之助に託されているとこれまで指摘されてきたが[1]、内容の面における漢籍との比較考察はまだ少なく、管見によれば、詩人林和靖関連説話の一つである「梅妻鶴子」のエピソードからヒントを受けたという千葉俊二の指摘[2]以外、見当たらない。また、この「梅妻鶴子」は中国宋の時代に書かれた『夢渓筆談・十』[3]に初めて記載され[4]、後の清の時代の短編小説集『西湖佳話』[5]『西湖拾遺』[6]などにも収められているが、谷崎が参考にしたのがどの書であるかも明確にされていない。

本稿では、先行研究で指摘された「梅妻鶴子」との関連以外に、白楽天の詩からの影響があったことを指摘したい。谷崎は早い時期から創作の際にしばしば白楽天の詩を引用し、自邸「潺湲亭」の命名も白楽天の詩にちなんだと考えられる。『鶴唳』においても、靖之助が日本で中国庭園を再現したという一挿話は、退官後の白楽天が洛陽で江南風景を再現し、悠閑な生活を送ることを想起させる。作家は直接言及してはいないが、内容上の類似性から見れば、『鶴唳』が白楽天の詩からヒントを受けたことは推測できる。

更に、『鶴唳』における鶴は、漢籍に描かれた林和靖の鶴および白楽天の鶴詩（鶴に関する詩）における鶴のイメージと共通する部分が見られるが、後に詳述するように新たな特徴が付加されてもいる。『鶴唳』に書かれた鶴のイメージは、谷崎後年の作品にもつながっているため、『鶴唳』の鶴像を分析することは谷崎作品全体を考える上で意義があるものと考えられる。

一　林和靖「梅妻鶴子」の出典及び作品との比較

西湖の麓に隠居生活を送り、梅と鶴を愛し、未婚ながらに一生を終わった宋の隠居詩人林和靖の事跡は、「梅妻鶴子」として知られている。「梅妻鶴子」の類話が収録されている漢籍には、稿者が調査した限り、日本において『西湖佳話』『西湖拾遺』『通俗西湖佳話』の三つが見られる。このうち、谷崎が自分の作品の中で言及しているのは『西湖佳話』のみである。まず『改造』一九一九年六月号に発表した小説『西湖の月』において次のように述べている。

食堂車のまづい洋食で飢を凌いで、しょざいなさに携へて来た石印の西湖佳話を読んで居るうちに、戸外は真つ暗になつてしまつた。

また、「聞書抄初出巻頭⑦」においても以下のように記述されている。

嘗て私は南支那を旅行して杭州の西湖に遊んだ時、昔蘇東坡が此の地に左遷されたことを思ひ起こして、左遷と云つてもかう云ふ山紫水明の土地に流されるなら何を悲しむことがあらうぞ（中略）『西湖佳話』に載つてゐる彼の詩に曰く、「湖光潋灩晴るれば偏に好し、山色空濛雨も亦奇なり、若し西湖をとつて西子に比ぶれば、淡粧濃沫也相宜し」。

右の『西湖の月』において、注目すべきは、小説の主人公が所在なさを紛らわすために石印版の『西湖佳話』を読むという設定である。陳美林の「墨浪子及其『西湖佳話⑧』」を参考に、『西湖佳話』の刊本を調査したところ、谷崎に年代的に近いものに一八九二年に上海文選局により刊行された石印のそれがある。更に、ほぼ同じ時期に谷崎が書いた戯曲『蘇東坡⑨』を参照すれば、以下のとおり、谷崎が石印版の『西湖佳話』を読んだことがあると確定できる。

『蘇東坡』は、登場人物、人物名、中に引用された漢詩文、エピソードなどいずれも中国典拠によったものと考えられる。当時日本で『蘇東坡』と類似した話を収めている漢籍は、大庭修の『江戸時代における唐船持渡書の研究⑩』によれば、前述した石印版の『西湖佳話』のほか、『西湖拾遺』がある。また、中国からの「持渡書」のみならず、文化二年（一八〇五）に大坂敦賀屋九兵衛より出版された『西湖佳話』の日本語抄本『通俗西湖佳話』がある。この三つのうちで、『通俗西湖佳話』は日本語版で読みやすいと思われるが、抄本であるため、内容の削除・省略が多く見られる。例えば『蘇東坡』の主要なストーリーであるところの主人公の毛沢民の暇乞いをめぐる蘇東坡とのやり取りなどはすべて見当たらない。また『蘇東坡』には次の詩が引用されている。

涙は欄干を湿ほし花は露を着く／愁は眉に到つて峰の碧聚ま

る／此の恨み平分して取れば／更に言語なうして空しく相窺ふ
二細雨／残雲意緒なし、朝々暮々[11]／今夜山深きところ／断魂潮
に分付して回り去らん

右の詩は、『西湖佳話』と『西湖拾遺』のいずれにも出てくる「惜分飛」という詩であるが、『通俗西湖佳話』には見当たらない。その原文は以下のとおりである。

涙湿欄干花着露、愁到眉峰碧聚。此恨平分取、更無言語、空相覷二細雨、残雲無意緒、寂寞朝朝暮暮。今夜山深處、断魂分付潮回去。

このような点から、谷崎が参照したのは『通俗西湖佳話』ではなく、『西湖佳話』または『西湖拾遺』のいずれかであると推察される。

『西湖佳話』と『西湖拾遺』とは、『西湖拾遺』の方が『西湖佳話』より後に世に出たため、収録している物語の数はより多いものの、両者が共有する説話の内容は殆ど一致する。谷崎の戯曲『蘇東坡』と関係のある蘇東坡関連説話は両方に収録されている。登場人物とエピソードは全く同じであるが、漢詩文には微かな違いが見られる。例えば、左に挙げた詩文は同じ内容ながら、傍線部の表現が異なっている。

碧澄澄凝一萬頃、徹底瑠璃、青娜々列三百面、交加翡翠、春風吹過、艶桃穠李如描、夏日照来、緑蓋紅蓮似畫、秋雲掩映、満籬嫩菊堆金、冬雪分飛、孤嶼寒梅破玉、暁霞連絡三天竺、暮靄横堆九里松、風生於呼猿洞口、雨飛来龍井山頭、簪花人逐浄慈来、訪友客投霊隠寺。（『西湖佳話』）

碧澄澄凝一萬頃、徹底瑠璃、青娜々列四囲、交加翡翠、春風吹過、艶桃濃李如描、夏日照来、緑蓋紅蓮似畫、秋雲掩映、満籬嫩菊堆金、冬雪分飛、孤嶼寒梅破玉、暁霞遠帯三天竺、暮靄高籠九里松、習習風生把酒、虎跑泉上、濛濛雨至、煮茗龍井山辺、聞遊人過浄慈来、好静客投霊隠寺。（『西湖拾遺』）

一方、谷崎の戯曲『蘇東坡』においてこの漢詩文は、次のとおりである。

碧澄々として、凝たり一萬頃、徹底瑠璃／青娜々として、列なる三百面、交翡翠を加ふ／春風吹いて過ぐれば、艶桃穠李描くが如く／夏日照らし来れば、緑蓋紅蓮畫に似たり／秋雲掩映すれば、満籬の嫩菊金を集め／冬雪分飛すれば、孤嶼の寒梅玉を破る／暁霞は連絡す三天竺／暮靄は横堆す九里松／風は呼猿洞口に生じ／雨は龍井山頭に飛来す／簪花人は逐ふ、浄慈来訪の友／客は投ず霊隠寺。

傍線部の箇所を見れば、『蘇東坡』におけるこの詩の引用が、『西湖佳話』によったものであることは明らかであろう。谷崎は『西湖

佳話』に単に言及したのみならず、実際それを熟読し、自ら創作の材源にしていたのである。『西湖佳話』からの創作と考えられる作品は、先述した戯曲『蘇東坡』のほか、『鶴唳』[12]においてもその投影が見られる。先行研究において、千葉俊二が指摘した『鶴唳』の創作にあたって、谷崎がヒントを受けた「梅妻鶴子」の話は『西湖佳話』巻五「孤山隠蹟」所収のものによっていると推測できる。

二　『鶴唳』と『西湖佳話』巻五「孤山隠蹟」との関連性

『鶴唳』と『西湖佳話』巻五「孤山隠蹟」との関連性について、まず、主人公の名前の類似性が指摘できる。『鶴唳』の主人公である星岡靖之助の名前は、「孤山隠蹟」の主人公である林和靖の「靖」にちなんでいると思われる。また、二者とも結婚を拒否したことも重要な一点であろう。『西湖佳話』において林和靖の結婚拒否は、以下のように書かれている。

人有勸其娶者、又有勸其出仕者、君復俱以不為然。因自思曰、人生貴適志耳、志之所適、方為吾貴。然吾志之所適、非室家也、非功名富貴也、只覚青山緑水與我情相宜。而鼓鐘琴瑟未嘗不佳、以我志揆之則落英饑可餐。笑拳案齋眉之多事、紫綬金章未嘗不顯、以吾心較之、則山林偏有味、愧碌碌因人之非高[13]。

同じく『鶴唳』の主人公靖之助も東京の大学を卒業した後、祖父が建築した「梅崖荘」に閉じこもって終日漢籍ばかり読み耽り、母に結婚の話を持ち出されるたびに固く断っている。

母親は侔の身を固めさせようといろいろ気を揉みましたが、何分当人がそんな風で、とても結婚する意志なぞはないらしく、手の附けやうがなかつたのです。

更に、結婚を拒否した林和靖と靖之助は、二人共鶴を愛している。和靖は、俗世を離れ、西湖の麓にある孤山で隠居生活を送っている。毎日遊山翫水に出て、客が尋ねてきてもわからないので、和靖は二羽の鶴を飼い、客の来訪を伝達させる。そして、言うことをよく聞き分けた鶴を自分の子になぞらえる。

和靖毎因山水之好、多不在家、便想一法、買下仙鶴二隻、置之園中、豢養已馴、遂縱之入雲、少頃、即歸入籠内、和靖大喜、道此猶吾子也[14]。

一方、『鶴唳』において、靖之助は、中国から戻ってきた時、一人の少女と一羽の鶴を一緒に連れてきて、それらを朝夕の友とする。

茲に断つて置かなければならないのは、靖之助は一人で帰つて来たのではなく、奇妙な二つの土産物を携へて来たのです。その一つは私があの庭で見た鶴でした。そしてもう一つは、それもあの鶴のやうな優しい姿をした、十七八の可愛らしい支那

の婦人でした。（中略）彼は一旦しづ子に與へた家屋敷を取り返して、置き所のない自分の身をそこに落ち着かせ、支那の鶴と支那の婦人とを朝夕の友としつつ、煩ひのない、好きな生活を営もうとしたのです。

林和靖と靖之助は、それぞれの性格などの差異はさておき、表層的な面においては「結婚への拒否」や「鶴への愛着」といった特徴が共通すると言うことができよう。ただし、両者の共通性はそれぞれ全く違うところから生じたものである。まず、結婚を拒絶した理由について、林和靖は西湖の山水を愛し、俗世間の功名富貴を追求するより遊山翫水のほうが一層心性を陶冶できると、自ら結婚を拒否する。いわば悠々自適な隠居生活を送ろうと望んだからである。それに対して、靖之助は、人間の欲望を捨てるよりむしろその極致を追求しようとするために、平凡かつ新奇のない生活に不満を持ち、平凡な女性との結婚を拒否した。作品には次のように書かれている。

その陰鬱を紛らす為めに酒を飲んだり芸者買をしたりして、始終母親に心配の種を蒔いたのでした。彼が東京の帝大の文科を出たのは三十七八年頃のことで、その時分は放蕩生活がますます募るばかりだつたのです。

さうして為す事もなくブラブラと日を送るより外に、彼には何の楽しみもないやうでした。其の頃の話ですが、靖之助はよく、「日本は詰まらない、何処か外国へ行つてしまひたい」と、口癖のやうに云つて居たさうです。

また、両者の鶴に対する感情にも違いが見られる。林和靖は、鶴を自分の子になぞらえながら、あくまで客の来訪を伝達させる従僕として扱っている。一方、靖之助は、中国から持ち帰ってきた一羽の鶴を、中国の少女と同じく自分の朝夕の友とし、自分と対等な立場に置いている。

そのほか、『西湖佳話』と同じく、『鶴唳』にも梅は多く書かれており、「鶴」以外のもう一つの重要な記号として注目すべきである。ところが、梅と人物造形の関係において梅が果たす役割は二作で異なっている。まず、『西湖佳話』において林和靖と梅との関係は、彼の梅への愛着として以下のように捉えられている。

園中艶桃穠李、魏紫姚黄、春蘭秋菊、月桂風荷、非不概植、而獨於梅花更自鍾情。高高下下、因山傍水、遶屋依欄、無非是梅。和靖所愛者、愛其一種縞素襟懐、冷香滋味、與己之性情相合耳。自此月増日曠、不覚恰好種了三百六十株[15]。

中国では古来より「梅・蘭・竹・菊」はその高潔、淡泊、世に媚びないといった品格によって君子の象徴と見なされている。歴代の文人たちは自らの詩や画の題材として、「梅・蘭・竹・菊」を好んでおり、その愛着によって、自分が君子であることを表明する[16]。従

って、『西湖佳話』において林和靖が梅を愛することの描写は、和靖が高潔な君子という性格を強調し、和靖の人物造形に役割を果たしている。

一方、『鶴唳』においては梅に関する描写がしばしば出てくるが、その多くは物語が展開される前に語り手である「私」が散歩した東京郊外の公園の風景として書かれており、主人公靖之助が登場する場面に梅が描写されることは少ない。『鶴唳』の冒頭に書かれている「東京から程遠くない海岸にある暖かい」、「旧幕府時代に何十万石かの或る大名の城下」、「ところどころの百姓や邸の庭の梅の花はあらかた散つてしまつ」たという物語の舞台描写は、一年前に谷崎が引っ越した小田原のことを連想させるであろう。小田原は昔から梅の名所として知られており[17]、更に、谷崎終平の回想録『懐かしき人々　兄潤一郎とその周辺』[18]によれば、谷崎一家は大正八年の暮に小田原に引っ越したという。そこの風景について「城下町の名残りあって静かな東京より暖かく良い処」、「海岸までは二、三町あった」と述べられているところから、物語の舞台とよく似ていることが分かる。従って、作中の梅に関する描写は単なる林和靖の説話からの影響だけではなく、住んでいた場所とも関連するものと推測される。作品における梅の描写中で主人公・靖之助と関わる部分は以下の一箇所のみである。

> 築山と云ふ程でもない極く柔かな勾配を持つたその丘には、公園のそれにも劣らない見事な梅の古木が五六株植わつて居る中に、支那の太湖石に似た岩がところどころに据ゑてあつて、その先の方はどうなつて居るのかハツキリ分らない、（略）。

ここで梅は単なる庭の一要素として描かれ、主人公靖之助がそれに対して愛着を持つとは描写されない。従って『西湖佳話』巻五「孤山隠蹟」において重要視される「鶴」と「梅」との二つの要素は、『鶴唳』においてそれぞれが持つ元来の意味合いが変化したり、薄れたりしているということが指摘できる。更に谷崎は「梅妻鶴子」から変奏したモチーフを、後に述べるように、その他の要素と新たに組み合わせることによって彼なりの物語を完成させたのである。

三　『鶴唳』と白楽天の詩

『鶴唳』を検討する上で、『西湖佳話』所収の「梅妻鶴子」譚以外に、もう一つの漢籍の影響が見られる。それは白楽天の詩（以下白詩と略す）である。なお日本において白詩を最も多く収録している『白氏文集』には様々な刊本[19]が存在するため、谷崎が読んだものを確定するのは難しい。本稿において、年代的に谷崎に近い刊本の『白氏文集』（支那哲学研究会訳注、菊地屋書店　一九一二・四）を

使用し、考察を行うことにする。

（1）谷崎と白楽天の詩

先行研究において『鶴唳』と白詩との関連性は言及されていないが、小説の内容と白楽天の鶴に関する一群の詩、「池上篇併序」とを比較すれば、その類似が見られる。それらの詩と作品の内容との関連を考察する前提として、谷崎の白詩との接触について確認しておく必要がある。谷崎は早い時期からしばしば創作に白詩を引用し、言及した。その白詩の言及はエッセイ「道徳的観念と美的観念」[20]が最初のものと考えられる。

天然は往々逆境に呻吟せる人をして詩人化せしむ、見よ、船を遶る名月江水寒き夜、潯陽江頭空船の孀婦が述懐は、白楽天が筆に依て以て琵琶行を為さしめしに非ずや。

ここでは、白楽天の「琵琶行」に言及されている。その後の作品、例えば『異端者の悲しみ』[21]、『蘆刈』[22]、『少将滋幹の母』[23]などにおいても白詩が言及・引用されている。引用の白詩は題名とそれを言及した谷崎の作品を挙げてみれば、「長恨歌」（『異端者の悲しみ』）、「琵琶行」（『蘆刈』）、「酔歌・示妓人商玲瓏」「勧我酒」「失鶴」「夜雨」「洛陽東花下作」「秋夕」「自嘆二首」（『少将滋幹の母』）などがある。

谷崎の少年時代は漢学が必要な教養として要求されることが薄れつつあったが、漢学を学ぶという前時代の名残がまだ尽きないため、基礎的な漢文古典との接触がまだ多く見られる時代でもある。[24]商家の息子として生まれた谷崎も漢塾に通い、学校で漢文古典と接触し、漢詩の試作も行っている。[25]また、日本において白楽天は李白、杜甫と比肩され、知れ渡った唐の詩人であり、その詩集『白氏文集』は千年も前に日本に伝わってきて、歴代の知識人の愛読の書と見なされ、日本文学に大きな影響を与えた。[26]従って、谷崎の『白氏文集』との接触は極く自然なことといえる。

（2）白楽天の詩と『鶴唳』

さて、『鶴唳』と白詩との関連については、まず作品のタイトルである「鶴唳」という言葉が注目される。白詩には「鶴唳」またはその類似表現がいくつか見られる。

池上篇併序　露清鶴唳之夕（略）

霓裳羽衣歌　翔鸞舞了却収翅、唳鶴曲終長引聲。

「鶴唳」という題名を単なる鶴の鳴き声という意味の言葉として解するに止まるだけでは、白詩との関連はさほど明確ではない。しかし、小説の内容、主人公に関する挿話などの諸方面を総合して考察すると、谷崎が白詩からヒントを受けた可能性は十分にあると考えられる。特に「池上篇」に「鶴唳」の語が使われていることは注

目に値する。『鶴唳』において支那趣味を持つ主人公の靖之助が中国への強い憧れから自邸に中国江南風の庭園を構築し、そこで隠居生活を送るという一節と、蘇州・杭州の刺史を辞して洛陽で江南庭園を再現した白楽天の悠々自適な隠居生活を暮らすこととの類似性を指摘できるからである。

白楽天が杭州刺史を辞めて洛陽に戻った長慶四年（八二四）、老後のために、また杭州から持ち帰った天竺石と華亭鶴二羽を安置するためにも水の豊かな宅を求めた[27]。その庭を詠む数多くの詩に表現された自邸は、江南の河や湖を髣髴させる、そのミニチュアとも言い得るものであったようだ。庭に配置せられた風物も、彼がわざわざ江南から買い求めたものであるという。ここの景観を詠んだ一群の詩をとりまとめたものが「池上篇」である。その序において、庭の配置物の出所について「楽天罷杭州刺史時、得天竺石一、華亭鶴二以帰（略）罷蘇州刺史時、得太湖石、白蓮、折腰菱、青版舫以帰」（楽天杭州刺史を罷めし時、天竺石一、華亭の鶴二を得て以て帰る。（略）蘇州刺史を罷めし時、太湖石・白蓮折腰菱・青板舫を得て以て帰る）と書かれている。また、庭の様子に関して、序に述べられている「池を巡る径」や「三島径に通ずる橋」のほか、その他の物に関しても以下のように詩に書かれている。

十畝之宅、五畝之園、有水一池、有竹千竿、勿謂士狭、勿謂地偏、足以容膝、足以息肩。有堂有亭、有橋有船、有書有酒、有歌有絃、有叟在中、白鬚飄然、識分知足、外無求焉。如鳥選木、姑務巣安、如龜居坎、不知海寛、靈鶴怪石、紫菱白蓮、皆吾所好、盡在吾前。時飲一杯、或吟一篇、妻孥熙熙、鶏犬閒閒、優哉遊哉、吾将終老乎其間。

このとおり白楽天の庭には、池、竹、堂、橋、池を巡る径、鶴、築山、怪石などが配置されていることが分かる。一方、『鶴唳』の靖之助の庭に関しても、「池の汀をうねつて居る路」、「二三丈の高さの崖」、「清新な竹」、「『亥』の字のやうな形に幾つも折れ曲つた橋」、「支那の太湖石に似た岩」、「池を前にして建てられた或る支那風の建物」などの描写が見られており、白楽天の庭にある池、竹、堂、橋、鶴、池を巡る径、太湖石などの配置と同じである。更に、それらの配置物は日本ではなく、遠く中国から運ばれてきたものである。

靖之助が帰つてから間もなく、或る日支那から材木だの瓦だの、種々な建築材料が届きました。それが着くと、靖之助は待ち構へて居たやうに大工を庭へ入れて、長い間住む人もなく荒れ果てて居たところの、――しかし、祖父以来深い由緒のある梅崖荘を、取り壊してしまひました。そしてその跡に、自分が一々指図して、それらの材料を組み立てました。それがあの

「鎖瀾閣」だつたのです。

靖之助の日本における中国江南庭園の造作と白楽天の洛陽における江南の再現とは、発想の面においてのみならず、設計においても共通点が多く見られるわけである。更に、谷崎自らの家「潺湲亭」の名にも白詩からの投影が窺える。[28]

四　白楽天と靖之助の鶴

『鶴唳』と白詩について、前述した「池上篇」との関連以外に、鶴を詠む詩との関連も見られる。王秀傑は、『仙鶴―鶴文化雑談集』において、鶴を愛する唐代文人の逸話の中から、とりわけ白楽天の例を挙げ、「白居易は非常に鶴を愛し、鶴を詠んだ漢詩が凡そ三十首もある」と指摘した。ところが、王は三十首の詩について具体的なものを挙げなかった。稿者が改めて調査・考証したところ、白楽天の鶴詩は三十一首あることが明らかとなった。この三十一首[29]の鶴詩における鶴のイメージは、基本的には、「感鶴」の「不群の者であり、飢えても腐鼠を啄まず、渇いても盗泉を飲まず」というような、高潔な君子として見なされている。また、「劉蘇州以華亭一鶴遠寄以詩謝之」のような詩人自身の喩えも見られるが、その多くは「病中對病鶴」「和裴侍中南園靜興見示」「失鶴」「郡西亭偶詠」「自喜」「答裴相公乞鶴」「家園三絶」のように「伴」として描かれる。

それに対して、『鶴唳』の鶴は、常に女性と同時にあらわれ、「女性と鶴」という組み合わせの存在として登場し、時に鶴を女性らしく、時に女性を鶴らしく描写されている。

送り込むと同時に鶴はぐつと唾液を嚥んで、眼には切ない涙を溜めさうに思ひますが、それは人間の考へで、彼女は猶も空を向いたまゝ、切なかつたのか旨かつたのか、兎に角ガアガアと鵝鳥の啼くやうな声で啼きます。（中略）彼女の神々しい真白な体が、――多分その鶴は丹頂だつたのでせう、（略）。

その叫び声を誰も気に留めなかつたのは、鶴の唳き声だと思つたからださうです。彼女は、やつと照子と同じくらゐな小柄な女で、而も非常に小ひさな足を持つて居たので、実際鶴が歩くやうにチョコチョコと走りながら、池の周りを逃げ廻つて南の丘の方へ駆けて行きました。（中略）殺された時の支那の女の悲鳴が、それが又、鶴の唳き声にそつくりだつたと云ふ話です。

靖之助の鶴は、中国から連れて帰ってきた支那婦人と同じように、彼にとって朝夕の友である。彼女の死ぬ直前の叫び声が鶴の鳴き声と同じように聞こえてくるという描写には、鶴と女性のイメージが重なったという含意が読みとれるであろう。つまり、作中の女性と鶴の関係は、女性の影に鶴があり、鶴の中に女性があるような、曖

味かつ奇妙なものである。それは林和靖の客の来訪を知らせる鶴とは本質的に異なっている。また、同伴者という意味合いにおいては、白楽天の鶴と変わらないようにみえるが、白楽天の高潔な君子である鶴に対して、靖之助の鶴はあくまで女性とかけ離れないような存在に扱われている。このような鶴像は、後年、谷崎の作品『少将滋幹の母』にも見られる。

父は最初、子供に覚え易いやうに、一句づつ句切つてゆつくりと云ひ、滋幹が一句を唱へ終わるのを待つて次に進むやうにしたが、さうしてゐるうちにだんだん教へてゐると云ふ心持を忘れ、己れの感情の赴くままに声を張り上げ、抑揚をつけて朗吟し出した。――

失うて庭の前の雪となり／飛んで海の上の風に因る／九霄應に侶を得たるなるべし／三夜籠に帰らず／声は碧の雲の外に断え／影は明けき月の中に沈む／郡斎これより後は／誰か白頭の翁に伴はん

滋幹は他日成長してから、此の詩が白氏文集にある「鶴を失ふ」と云ふ題の五言律詩であることを発見したので、当時は何のことか解し得なかつたのであるが、（略）。

『少将滋幹の母』においても、美貌の若妻・北の方を奪われた国経は、白詩「失鶴」を吟じ、妻を鶴になぞらえ、無限な悲嘆の念を訴える。鶴に関して、典拠の中には見られない女性的な性格を『鶴唳』においては、付け添えられ、新たな鶴像を作り上げたのである。

終わりに

本稿において、林和靖関連説話「梅妻鶴子」の先学の指摘を手がかりに、『鶴唳』の漢籍受容に関する文献資料を可能な限り調べ、類似内容の説話を収録された作品と比較し、その内容、年代、谷崎の言及などを総合的に考察した。影響を与えたと考えられる一八九二年の石印版の『西湖佳話』第五巻「孤山隠蹟」との相違を検討した上で、更に白楽天の詩からの影響を指摘し、内容上の比較を行った。ところが、『鶴唳』における鶴のイメージは、出典と考えられる『西湖佳話』と白楽天の鶴詩に描写される鶴とはまったく異なったものであり、谷崎風に女性化した鶴であった。

女性が鶴に喩えられる設定は、谷崎の後年の作品『少将滋幹の母』にも見られるが、それより二十八年前に書かれた『鶴唳』はすでにこのイメージを先取りしている。『鶴唳』に登場する中国婦人と『少将滋幹の母』の北の方は、時間的にも空間的にも遠く隔たっている人物であるが、同じく鶴になぞらえることは、実に興味深い。それは谷崎作品における女性像を理解し、その創作モチーフの展開を考える上で意義がある一点であろう。

注

① 西原大輔はその著書『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』（中央公論新社　二〇〇三・七）において、「谷崎潤一郎が「支那趣味」の文学を集中的に生産したのは、もっぱら一九一七年から一九二一（大正十）年にかけての時期である。（中略）「支那趣味」に魅せられたこの日本人作家も、中国に激しく恋い焦がれた」と述べ、谷崎が「中国への憧憬」を小説『鶴唳』を通じて「思う存分に表現した」と指摘した。

② 「オリエンタリズムを越えて」『谷崎潤一郎　上海交遊記』（みすず書房　二〇〇四・十）

③ 筆記、全二十九巻、宋沈括撰。人物、説話、政治、芸術、薬学などの知識を十七の部類に分けて記述されている。

④ 王秀傑『仙鶴――鶴文化雑談集』（遼海出版社　二〇〇八・一一）

⑤ 清墨浪子編全書名『西湖佳話古今遺跡』、一六七三年に成書。西湖にまつわる説話一六篇を収録する短編小説集。

⑥ 清陳梅渓編　一七九一年に成書。西湖にまつわる説話四八篇を収録する短編小説集。

⑦ 初出『大阪毎日新聞』（一九三五・一・八）

⑧ 陳美林「墨浪子及其『西湖佳話』」『東南大学学報』第一巻第二期（一九九九・五）

⑨ 初出『改造』（一九二〇・八）

⑩ 大庭修　関西大学東西学術研究所（一九六七・三）

⑪ 「此恨平分取、更無言語、空相覷二細雨、残雲無意緒、寂寞朝朝暮暮」という句に関して、谷崎の書下し文は、「寂寞」という言葉が訳されなかったが、そのまま引用する。

⑫ 初出『中央公論』（一九二一・七）

⑬ 書下し文：人に其れ娶ることを勧む者有り。又其れ出仕を勧む者有り。君復は倶に以て然りと為さず。因つて自ら思ひて曰く「人生は志に適ふことを尊ぶのみ。志の適ふ所、方に吾が尊ぶこととと為す。然るに、吾が志の適ふ所、室家に涉ざるなり、また功名富貴に涉ざるなり。只だ青山緑水我が情と宜しと覚ゆるのみにして。鐘琴瑟を鼓すこと未だ嘗て佳からず。我が志を以て之を揆るに則ち落英、飢えに餐ふべし。挙案斉眉多き事を笑ひ。紫綬金賞未だ嘗て顕れず。吾心を以て之を較ずるに、則ち山林偏に味有り。碌々として人の涉高を愧ず。

⑭ 書下し文：和靖は毎に山水之を好むに、家に不在多し。便ち、一法を想ひ、仙鶴二隻を買ひ下げて園中に置く。豢養して己に馴れ、遂に之をして雲に入らしむ。少頃して、即ち帰りて籠内に入る。和靖は大きに喜びて道ふ「猶ほ吾子のごとし」。

⑮ 書下し文：園中に、艶桃、濃李、魏紫、姚黄、春蘭、秋菊、月桂、風荷を概ね植ゑざるには涉ずして、独り梅花に更に自ずから鐘情す。高高下下、山に因り水に傍し、屋を遶り欄に依るも、是れ梅に涉ざるは無し。和靖の愛す所の者は、其の一種の縞素襟懐、冷香滋味、己の性情と相合ふるを愛するのみ。此れより日を増し月を重ね、覚えず恰も好き三百六十株植たり。

⑯ 『大漢和辞典』（修訂第二版　諸橋轍次　大修館書店　一九八九・六）と『日本大百科全書』（小学館　二〇〇一）によれば、蘭・菊・梅・竹は、草木や花のなかで気品があり高潔であるところから、草木の四君子と呼ばれ、東洋画の題材とよくされ、中国で特に宋・元代の文人画家の間で流行し、日本でも盛んに描かれたという。「集雅斎――梅竹蘭菊四譜・小引」の「文房清供、独取梅竹蘭菊四君者、無他、則以其幽芬逸致、偏能滌人之穢腸而澄瑩其神骨」の出典も挙げられた。

⑰ 『日本の名産事典』（遠藤元男・児玉幸多・宮本常一編　東洋経済新社　一九七五・十）によれば、小田原の梅は、神奈川県の特産であり、その

歴史について、小田原城主人久保忠真が寛政八年に、藩士の家には梅を必ず植えること、また古木を保存することを命じて梅の栽培を奨励していたことをきっかけに、それ以来、町人、農民も梅を栽培するようになったという。

⑱ 文藝春秋　一九八九・八　初出「兄・潤一郎と千代夫人のこと」『文学界』（一九八八・五）

⑲ 例えば、『白氏文集抄』阿忍寫　建長二年（一二五〇）、『白氏文集』七一巻　那波道圓校刊　元和四年（一六一八）、『白楽天詩集』（近藤元粋編　全五巻　一八九六）、『白氏文集』（支那哲学研究会訳注、菊地屋書店　上・下　一九一二・四）、『白楽天詩集』（南州近藤元粋評訂嵩山堂刊行　1・2　一九一二）などが挙げられる。

⑳ 初出『学友会雑誌』第三八号（一九〇二・六）

㉑ 初出『中央公論』（一九一七・六）

㉒ 初出『改造』（一九三一・一一、一二）

㉓ 初出『毎日新聞』（一九四九・一一・一六～一九五〇・二・九）

㉔『日本漢学』（水田紀久　頼惟勤編　大修館書店　一九七三・四）において、明治時代の漢学について、明治維新後、西洋文明崇拝の傾向は日に日に増大し、漢学は新興の洋学に圧倒されて次第に衰滅の道をたどったが、幕末以来の漢学者がなおしばらく健在であり、長い習慣による漢学の教養は実用の生命を保ち、江戸時代の漢学余勢は明治前期にはまだ継続していた。特に漢詩文は江戸時代にも劣らぬくらい流行していた。このような情勢は、一八九四・五年の日清戦争において、日本が清国に大勝したことをきっかけに、中国文化にたいする尊敬の念がうすれ、ひとえに衰微してゆくばかりであったと書かれている。谷崎は、ちょうどこのような漢学習得の最後の風潮の中その少年時代を過ごした。

㉕ 谷崎はその自伝的な作品『神童』（『中央公論』一九一六・一）や『幼少年代』（『文芸春秋』一九五五・四～一九五六・三）などにおいて、自分が学校の授業で漢詩を試作したことや、漢文先生の影響でさまざまな漢籍と接触したこと、また漢学塾秋香塾に通ったことなどを述べている。

㉖ 堤留吉『白楽天研究』（春秋社　一九六九・一二）による。

㉗ 中純子「白居易と詞――洛陽履道里における江南の再現」――『白居易研究講座第一巻　白居易の文学と人生1』（勉誠社　一九九三・六）による。

㉘ これに関して、谷崎は「『潺湲亭』のこととその他」（『中央公論』一九四七・一）というエッセイを書いているが、命名の出典については明確に言及していない。命名の理由として、「窓の外には絶えず白川の水の音がした。ふと私は、此処に住んでこの家を「潺湲亭」と呼んだら、などと思つた」の一文が挙げられる。一方、白楽天詩集にも同じ「潺湲」が用いられ、類似した趣向を詠む詩が数首見られる。「亭西墻下伊渠水中置石激流潺湲成韻頗有幽趣以詩記之」「六月灘聲如猛雨、香山楼北暢師房。夜深起凭闌干立、満耳潺湲満面涼。」谷崎が白楽天を愛読したため、「潺湲」という言葉には、白楽天の詩からの投影があると推測できる。

㉙ タイトルは以下のとおりである。①病中對病鶴　②感鶴　③洛下卜居　④寄庾侍郎　⑤解印出公府　⑥代鶴　⑦和裴侍中南園靜興見示　⑧失鶴　⑨題籠鶴　⑩郡西亭偶詠　⑪自喜　⑫有雙鶴留在洛中忽見劉郎中依然鳴顧劉因為鶴嘆二篇寄予予與二絶句答之　⑬答裴相公乞鶴　⑭送鶴與裴相臨別贈詩　⑮池鶴二首（一）　⑯池鶴二首（二）　⑰問江南物　⑱嘆鶴病　⑲問鶴　⑳代鶴答　㉑家園三絶　㉒雞贈鶴　㉓鶴答雞　㉔烏贈鶴　㉕鶴答烏　㉖鳶贈鶴　㉗鶴答鳶　㉘鵝贈鶴　㉙鶴答鵝　㉚鶴　㉛劉蘇州以華亭一鶴遠寄以詩謝之

〔附記〕

本稿で引用した谷崎潤一郎の文章は、『谷崎潤一郎全集』全三十巻（中央公論社　一九八一・五～一九八三・十一）による。なお、日本語文章の引用に際して、ルビを簡略化し、漢字は原則として新字体に改めた。また『西湖拾遺』の引用は京都大学図書館所蔵のもの（「乾隆辛亥（一七九一）孟冬月銭塘梅渓陳樹基撰」の自序あり）による。其の他、漢文を引用する際、句読点はすべて稿者が付した。